

偽手紙

井本元義



「一」

ドアを少し開けて隙間から覗くと、その男もこちらを見
た。一瞬、警戒する眼の鋭さを感じられたがすぐに客にた
いする優しさに変わった。中へ入ると、彼の笑顔が私を迎
えた。綺麗な眼をした好男子だった。歳は私とおなじく
らいだろう。口の周りの短い髭の手入れは、帝政ロシアの
インテリゲンジャを想像させた。たとえばカラマーゾフの
イヴァン、弱々しいインテリではなく、強い意志を持ちな
がら、時代の流れに逆らって生きていく男、私は勝手に思
い浮かべながら、この男とは仲良くなれそうだと思った。

2

中はありふれたバーだった。黒と茶色の基調のつくりで、
けばけばしさはない。カウンターに七、八人、奥のテーブ
ルが三つで七、八人くらい入る広さである。表の看板を見
て思い込んだ雰囲気とは違うが、居心地はよさそうだった。

「ルイズ」という店の名前は、やや古い時代の娘盛りを
超えた西洋の女性を思わせた。

雪の多い正月が明けたばかりだった。私は一人の友人K
を訪ねた。毎年届く年賀状が今回はなかった。しばらく顔
も見えていなかったし、彼が経営しているクリニクを訪ね
ることにした。家にこもっていた時間が長かったので、残
雪を踏むのは心地よかった。彼は私の顔を受付の窓口から
ちよつと覗いて、忙しいからとすぐ奥へ引つ込んだ。夕方
なのに彼が私を拒むのは滅多にないことだった。理由はわ
からないが私はそう気にはしなかった。今までもこういう
ことは時たまあった。前に私が同人誌に発表した小説は三
分の一くらい彼をモデルにしたものだった。私は数十年に
わたる彼との付き合いで深い尊敬の念を持っていた。今回
の作品は彼へのオマージュのつもりであったが、彼の暗い
面や、私が心配する危なっかしい性格を表現したのが、彼
の気分を害したのだろうか。気にはしなれないと思いつつ少
しは気が重かった。せつかく街へ出てきたのだから軽くど
こかで飲んでいこうと思う時間だった。

私はちよつと上等の酒を頼んだ。男は私をいい客と思っ
たのかにこやかな口調で何かを話しかけた。澄んだ目と彫
の深い顔立ちだったが、博多弁の発音に頬が少しだらしな
く緩んだように見えた。しかしそれが彼の優しさだと感じ
られるのに時間はかからなかった。

カウンターの奥で四人ほどがぼそぼそと何かを語り合っ
ていた。私は内容がどうあれ他人の話聞くのは嫌いで
なかった。それで聞こえる範囲で少し彼らから離れて座つ
た。まだ誰も酔ってはいないので話は弾んではいなかった。
その男、マスターが口を開いた時、一同はああそうだと
うなずいた。

「すみません、七時なのでちよつとニュースを見させてく
ださい」

テレビは昭和天皇崩御の映像を流していた。私は午前中
のニュースで見て、今日はこればかりだろうと思いつつは
忘れていた。詠嘆調の声が同じ言葉で何度も流れていた。
皇居前の広場に長い列が続いている。厚手の服に身を包み、
みんな下を向いている。突然一人の男の顔がアップされる。
四十代半ばのサラリーマンだろうか。閉じた眼から涙が流
れている。マスターがつぶやく。

「この男の涙は、よく分かん。何故泣くのかな」

四十代半ばといえば、私もまたおそろくマスターも同じ
だろう。天皇にある程度の親しみがあつたとしても大粒の
涙をそう流すこともないだろう。

「天皇陛下におかれましては、この数日間、輸血を続けら
れ体力の回復を待っておられましたが、下血も激しく、そ
の繰り返しの中で体力も次第に消耗されるに至りました。
本日午前・・・」

3

マスターは同じニュースを何度も見たのだろう。黙ってスイッチを切った。

その時、客の一人が声を高くして少しふざけ気味に言った。周りを笑わせようとしたのだろうか。

「まさに、昭和の吸血鬼だよな」

誰も笑わなかった。妙な空気が流れて停滞した。数秒間沈黙が続いた。

「そんなこと言うなよ。天皇の手柄を見ろや」

「しかし、昭和は何百万人も血が流れた時代だ」

三人目の声が出た。横並びなので顔は見えない。私は彼らの口論が発展するのを期待していた。

「天皇陛下のおかげで、戦争は終わったのだ。長い間、歴史に翻弄され続けられて、やっと最後に自分の意志を通された」

「そりゃそうだろうが、事実と結果に責任がないとは言えないぜ」

「あの時代、日本を西洋から守るため、日本はどうすればよかったのか。太平洋戦争は止むにやまれぬ、状況だった」

「天皇陛下の手柄を見て、マッカーサーは死を免じた。アメリカでは七割の人間が天皇の死刑を要求したらしいじゃないか。それでも助かった」

「じゃあ、どこに誰に責任はあるのか。どうやったら戦争

をしなくて済んだのか」

「東条英機やA級戦犯たちが、天皇の名を語ったとは言えないか。東条英機が靖国神社に合祀されてから、天皇陛下はお参りを止められた。苦しかっただろう、戦死者たちにお参りをされたか。たに違いない」

「天皇個人の話ではない。そもそも現人神と言ったのが間違いだ、誰が言い出したのか。神の下の平等、この人間差別は、何なのか」

「日本は神の国、悠久の歴史に育まれた浪漫の国、か」
「未だに、日本は世界の中で、また身の狭い気持ちで生きて行かねばならない。ナチスと同じように扱われることもある」

「天皇がなぜ生きながらえたか、教えようか。ちよつと歴史を詳しく見ればすぐにわかる。進駐軍は日本を占領するにあたって、相当に歴史と当時の状況を分析している。右翼、左翼問わず研究して知識人に質問している。獄中にいた羽仁五郎という左翼学者が言ったそうだ。天皇を殺せば日本は必ず赤化する。ソビエトを次の恐怖と考えていたアメリカはその一言で震え上がった」

「中国や韓国が天皇の死を悼むのではなく、非難するだろうな。墓に戦争の罪と闇を持っていった、と」

その時あまり喋らなかつた太い声が聞こえた。低い声だった。その声の後はまたしばらく沈黙が訪れた。

「天皇が切腹すればよかったのだ。そうすれば日本は浪漫の国、武士の国、美しい歴史の国でいられた。アメリカもソ連も日本には手出しはできない」

マスターは顔を落とし黙って聞いている。時々顔を上げると悲しそうな表情だ。

「大戦中、ヒットラーを暗殺しようとした人間がいたらしいね。日本では天皇を暗殺しようとしたのはいなかったのかな。どちらにしろ状況は変わらなかつたらうが」

「いや、明治の終わりに明治天皇暗殺未遂事件というのがあった。誰でも知っているだろう。大逆事件だ。真偽のほどは確かではないが。日本を近代化し西洋列強に負けない国づくりを成し遂げ、まさに神に等しい明治天皇が暗殺されたら、日本はどうなっていたか。それでも結局は国民の意識は変わらず、同じだったかな、どうかな」

「幸徳秋水とかいう社会主義者が首謀だったらしい。女性も一人いたな。十数名が死刑、縛り首だった。ほとんど関係がなさそうな若者も仲間になったと無理やりに白状させられて死刑になった。ひどい事件だよ」

「だがさすがに当時の文化人たちの多くは、擁護にまわつたということだ。死刑はひどすぎる。暗殺の善悪は別にして、反逆なくして、改革はない、と演説したのは、森鷗外だったか、徳富蘆花だったか、覚えていないが」

「あれは、千九百十一年だ。幸徳秋水の友人だった大杉栄

というのがいた。彼はかなり急進派だったが、その時なぜ捕まらなかつたか、調べたことがあるんだよ。運よく彼はその前の何かの騒動で千葉刑務所にいらしたらしい。それでも危なかつたとは言っているがね」

私は中学で社会歴史を教えている教師だった。彼らの話に入ってきたかったが、天皇の話は遠慮したかった。だがここまですると、少々ペダンティックな癖のある私は口を閉じたままに耐えられなくなった。

「千九百十一年という、面白い年なんです。まず中国では辛亥革命が成功。日本では、世界のだれもが驚くけれど、こんなに早い時代に、ウーマンリブが始まった。平塚らいてうの「青鞜」の発刊。そして九州の片田舎でひっそりと天才画家青木繁が死んでいった。これらにあまり関係はないが、炭鉱王伊藤伝衛門と白蓮の結婚。翌年には明治天皇は死にます」

ちよつと座が白けたが、その時鳴った電話の音に皆が一瞬身をこわばらせた。マスターが神妙な声で受け答えしている。客は何か心配事でもあるように黙ってマスターの表情を見ている。

電話が終わるとマスターが皆を見回すようにして口を開いた。表情は硬かったが、無理やりに微笑もうとしているのがわかった。

「今、ある右翼団体から電話でした。天皇陛下の崩御の時、

お前のところはなぜ営業して酒を出して遊ぶのか、ということ。いまからそちらへ行くから、覚悟しておけ、と」

最初からいた四人は恥ずかしそうだったがあわてて出て行った。私はなぜか残った。

右翼の人間がどんな話をするのか興味があった。いきなり暴力沙汰にはならないだろう。だが結局は誰も来なかった。彼らも一軒一軒訪ねるのも大変だろう。私とマスターはあまり言葉も交わさず飲んでみた。ご迷惑をかけたから一杯分をご馳走します、と言ったあと、彼は私を驚かせた。「僕は実は大杉栄の孫なんですよ」

それが、○君との出会いだっただ。

「二」

私が十三、四歳の頃だったろうか、「天城山心中」という事件が世間を騒がせた。

難しい漢字を飛び越えながら、新聞に目を通すのが楽しかった。学習院の男子学生と、旧満州国皇帝の姪がピストルで心中したという事件だった。男の付き纏いの嫉妬の結果という説や、天国に結ぶ恋など、様々な記事が流れた。

丸坊主の男の写真に理由もなく憎しみを覚えたが、それよりも幼い私の気持ちを乱したのは、「満州国の姫」とい

う内容も歴史も知らないまま聴くその言葉の響きだった。大戦の悲惨さを直接に受けていない私、というよりまだ何の知識もない少年の私には、満州国というのはまだ見ぬ遠い浪漫に満ちた歴史の国に思えたのだった。

長ずるにつれて少しずつ歴史を学んできた私は、偶然に手に取った満州国皇帝愛新覺羅溥儀の手記「我的前半生」という本に興味をそそられた。続いてその家庭教師であったジョンストンという英国人の「紫禁城の黄昏」にも興味を持った。歴史に翻弄されながら、苦しみから眼をそむけ、豪華贅沢と阿片に身を持ち崩し滅びていく一族、不条理の苦難に押しつぶされていく人民、その流れを追っていくことに私は奇妙な快感さえ覚えた。「天城山心中」の印象が長い間私の心の奥底に身を隠して住んでいたのだ。

三流大学の文学部、に身を置いた私の卒業論文は「満州国の成り立ちと崩壊」がテーマだった。ただ、大した論文ではなかった。その二冊の本に書かれた歴史と大戦の記録に記された事実を重ねて継ぎ接ぎしただけのものだった。

東京裁判までは踏み込まず、最後は元憲兵大尉甘粕正彦、当時の満州映画会社の社長の青酸カリの服毒自殺で締めた。関東大震災のどさくさに紛れて、無政府主義思想家大杉栄と妻伊藤野枝と甥の少年を虐殺したあと、十年の刑を受けるが三年で出所し陸軍の費用でパリへ留学、帰国後は官僚として満州にわたり、のちに満映という植民地政策の国

策映画会社の理事長になる。「満州の昼は関東軍、夜は甘粕」といわれた。暗黒街にも顔の利く男だったという。彼の個人的な話にも触れた論文だった。

大杉栄が虐殺された事件は大震災の衝撃とともに、その後の日本が一気に軍国主義に突き進んでいく最初の切っ掛けだった。歴史を辿りながら、私はむしろ甘粕の殺人者としての心の闇と、なま臭い保身と権力に身をゆだねるその愚劣さと猥雑さに興味を持った。洋行帰りのインテリとして振る舞いながら、満人日本人を問わず、幾人もの女優を凌辱したに違いない。表では教養のある紳士を装って。

大杉栄のことは、その虐殺された状況への私の興味は、それを行使した卑劣な甘粕の異常さの影に隠れていた。

また、苦難の運命に蹂躪される人民大衆、満州人の怨みの雄叫びを無視しながら、権力闘争と傲慢さに目を開くことが出来なかった当時の軍人たち。その愚かさをだれも追求しようとはしなかったのか。

「お金ではない、一つの国を創り上げようとする情熱とロマンに満ちた男たちの夢・・・」などと宣伝していた老映画俳優の言葉が、その歴史の記事となっている資料に私は空しい怒りしか覚えなかった。

空疎な国家権力の行使、愚劣な行動、その軍人たちの空しい傲りに、私は論文には書けなかったが、矮小で猥雑な醜悪さの印象を拭い去ることが出来なかった。その猥雑さ

を追求し記すことが私の一つの満足、やりがいだった。甘粕正彦の血を吐く苦痛の表情が論文の締めくくりだった。

大学を出てから私はしばらく東京の小さな出版社に勤めていた。ある時、友人達とドライブに出かけたことがあった。鎌倉、葉山と海岸を回る時、一人が言った。

「日蔭茶屋で飯を食って行こう」

「大杉栄が殺された事件で有名だ。今は宿はやつていない」

私は賛成したが、秘かに恥じていた。その事件のことは知ってはいたが、詳しくは知らなかった。帰ってから調べるともりで、そのレストランをゆっくり見回して印象に残そうとした。しかしそれはもう何十年も前に建て替えられて名前が残っているだけだった。和風の高級レストランで食事の味はともかく価格は高かった。

長い間、読書の習慣を失っていた私は、それでも帰るとすぐに彼の本を買って「お化けを見た話」を読んだ。日蔭茶屋を仕事場にしていた大杉は、神近市子の経済的援助を受けながらも、伊藤野枝を愛し、妻の堀保子ともどもに自由恋愛を説いていた。というよりそうせざるを得なかったということだろう。その宿である晩、彼は嫉妬の神近市子に喉を切られる。重症ではあったが助かる。その顛末が詳しく書いてある。この事件後、大杉は仲間たちから疎んじ

られるが彼は気にしない。刑期を終えた神近も何年後かには、彼を軽んじる発言をする。「あの人はいはずれ社会主義運動から脱落して、生物学者か何かになったでしょう」

彼ののびやかな文章に私はすぐに引き付けられた。学生時代に読んだことのあるいくつかの文章が改めて新鮮に感じられた。「獄中記」や、「死灰の中から」や、「日本脱出記」など、どれも読み易かった。彼らを描いた小説立野信之の「黒い花」や瀬戸内寂聴の「美は乱調にあり」や「諧調は偽りである」などもその頃の評判の本だった。この日蔭茶屋訪問が私を甘粕正彦の悪夢から、大杉栄の明るさ、なぜか明るく感じられた、へ転換させた。

伊藤野枝とのいきさつの、「死灰の中から」は大杉の青年らしい感覚と、野枝のひたむきさが正面から向き合い恋に発展していく、むしろ小説、名作と言つていいほどの想像力をかきたててくれた。小さなY村の鉋毒事件問題で、彼女はいちずに大杉にぶつかつていく。「僕が彼女の手紙によつて最も感激したのは彼女のこの血の下たるような生々しい実感のセンチメンタリズムであつたのだ。本当の社会改革家の本質的精神であつたのだ」野枝は彼の精神に真新しい息吹を吹き込んだ。また平塚らいてうの下で勉強しながらさらに理性を磨いていく。そして長年大杉に献身的に仕えた妻の堀保子や、経済援助も惜しまなかつた新聞記者の神近市子の中にあつてただ素朴な情熱で大杉の心を掴

「日本脱出記」は私に本当の歴史の面白さを教えてくれた。偽造パスポートで中国を行き来し、ついにはヨーロッパに渡り捕えられて入獄する。しかし意気揚々としたものである。何の物怖じもしていない。歴史を直接大きく変換させるわけではないが、自由闊達な若者たちが振る舞う明るさは、奔流する歴史の底辺でも光を放ち、未来への方向を指している。

また彼の自伝的な文章にはだれでも引き付けられるに違ひなかつた。幼少の頃から暴れん坊ぶり、反抗精神、しかも悩まされる吃音、それらも彼の間臭さの魅力だった。いつも警察の監視を受けながら、それでものびのびと未来の明るさを求めて、大正の時代を駆けるように生きていたと思われた。

初めは父のように軍人になるつもりで陸軍幼年学校へ入るが、軍事教育に反発して、彼の権力への反抗心は芽生える。丁度世間を騒がせていた「足尾鉋毒問題」で騒ぐ学生を見て彼は社会問題にめざめる。「気ままな本能的に自由に憧れていたが、それが理論づけられ社会的に拡張される機会がごく自然に来た」と彼は書いている。

また初めて幸徳秋水の論文を読んだ時には「その白刃のような筆」と絶賛し、「軍人生活の束縛と盲従とを呪つていた僕は、すっかり秋水の非軍国主義に魅せられてしまつた」と感激している。

んでしまふ。大杉の懐へ飛び込んで行つたというより、彼もまたそうしてもらわねば心のよりどころが失われてしまふいそうである。人妻でありながら夫と子を捨てて野枝は大杉に走る。

「獄中記は」よく知られた出歯亀や、受刑者から獄吏になつた沈黙する岩のような男、様々が人間臭く書かれていゝる。そして彼自身も暴れたり、丸裸で殴られたり、天真爛漫に獄中生活を味わつていゝるようだった。勿論、むごい仕打ちに打ちひしがれた悲惨な人々を決して忘れてはいない。また入獄するたびに外国語を一つマスターすると決めていゝるのも面白い。

また彼は述べていゝる。「……いよいよ既決監へ入ろうとする日、刑期も短いし冬の寒い間でもあるし、慰めに旅行記で読んでみようかと思つてそんな本を探していた。：偶然、また、ファールブルの『昆虫の生活』に出会つた」そしてある学者の言葉を引用していゝる。「昆虫記は、最も下等な生物の中にすら不可思議な力のあることを我々に示すものだ。そしてこの比類ない著者は、同時にまた、物を知りたいという渴望、物を学びたいという情熱、すなわち美が我々に与えるのと同じ高尚な享楽と深い逸楽を我々に感じさせる。それは自然のバイブルだ」そして大杉は記す、「僕は哲学者のように考え、美術家のように見、そして詩人のように感じて書く」この言葉が好きだ。

政治論文では、社会主義者というより彼は自分を無政府主義者と呼んだ。「平民新聞」「近代思想」「文明批評」「労働運動」など発刊したり廃刊したり、労働者大会では演説し、彼らへの啓蒙化活動を続ける。語学が堪能な彼は幾多の翻訳を出す。論敵には容赦はしない。労働者党一党独裁には全く賛同しないが、労働者の一人一人が生きていくと生きる事がすべてであると語る。賃金、労働条件の向上などを獲得すべきだが、それは彼らの人生の質を高めるため、それは一党独裁では叶えられない。

「同一地方の種々なる労働組合が相集まつて労働組合地方同盟を形作るに及んでその組合は少なくともその地方におけるあらゆる労働者の利害を代表する。この中に今日の市町村に代わるべき将来社会の単位を見ることが出来る。また、同職業、同工業の結合たる同業労働組合全国同盟をつくり、一大連合をなし、この二大連合が相依り相助けて、さらに労働総同盟の大組織によつて終わる」

「各労働組合の連合が国家の根本をなすべきで、中央集権によつて各単位の活力を抑圧するものではない。各地方同盟はすべてまったく自由自主である。そして組織の各段、ことにも格段内にも、常に自由なる個人的発想が最も大きな役目を果たしている。組織は自主と連合との社会的個人主義の根本に基づく」

彼はあくまで個人の活力と発想が社会、国の根本にあり、

それらが全体を動かしていかねばならないと説く。また、
こう叫ぶ。

「僕が一番好きなのは、人間の盲目的行為だ。精神そのま
まの爆発だ。思想に自由であれ。しかし行為にも自由であ
れ。そしてまた動機にも自由であれ」

「真に自己のためになると同時に、また他の同類のために
なる最も美しきは激情の爆発。もっとも大いなる献身。も
っとも崇高なる人道愛の発現。これ即ち、『秩序』の『紊
乱』である。『秩序は』僕らの真の死であり、『紊乱』は
真の生である」

これらの論文も平易な言葉が続き、分かりやすい。何冊
も続けて読んで、飽きなかった。それは政治論文であり
ながら、政治や国の形をどうすべきかという具体的な方法
論でもなく、革命論とも違いあくまで思想を述べていたか
らだった。また彼の自伝的な文章には誰もが引き付けられ
るに違いなかった。

私の東京時代の日本は高度成長期で、その頃の労働運動
の時代とはもう違っていた。私の努める会社は小さく労働
組合もなかったし、私も興味はなかった。労働条件を社長
と面談で決めて一年間過ごすだけだった。多少の不満はあ
っても私は受け入れた。そんな私に彼の著書は労働問題を
解くものでもなく、反体制の政治運動の手引きでもなく、

私は冗談を言うように返事をした。

「あの、大杉栄のご親戚か何かですか」

帰ってきた答えが私を驚かせまた喜ばせた。

「そう、大杉栄の弟さんのお孫さんにあたるの」

名刺を交換した後、私はいろいろ自分の知っていること
を喋り、また質問した。私の知識は間違いが多かったが、
彼もまた親や親戚から聞いた話でしか知らなかった。た
々な資料があるとのことだった。彼は棚から一冊の本を
取り出してきた。著者は知らないが、写真の多い大杉栄伝
だった。

その一枚が、私を興奮させた。ピントのはつきりしない
小さな写真、積まれた瓦礫の写真だった。その下に古井戸
があるとの事だった。首を絞められ、蹴られ肋骨を折られ
果ては裸にされ菰で巻かれた大杉栄や野枝や甥っ子の死体
がそこへ捨てられた。さらに土や板切れや震災の瓦礫が投
げ込まれ、満杯になってもまだ積み重ねられた。まるで恐
ろしい罪を地中深くに閉じ込めてしまおうとするかのよう
に。瓦礫を運ぶ犯罪者たちの手は震えて止まらない。

今まで何度も官憲の暴力を受けてそれに慣れていた彼も
まさかと思ひながら気を失い死へと落ちて行く。肋骨の折
れる最後の一撃は甘粕大尉の泥にまみれた軍靴だったろう
か。野枝も自分の死が信じられない。甥っ子の死はほんの
一瞬だったろうと思うことでは救われない。私の興奮は

反抗心をくすぐる、胸の奥に小さな灯りをともしてくる
だけのものだった。もし彼が生きていたら、それは不本意
だと苦笑したかもしれない。

新宿三光町にある「風紋」という店はいわゆる文壇バー
だった。私は出版の打ち合わせによく利用した。一人で飲
むこともあった。名前だけしか知らない作家に会うことも
多かった。マダムの聖子さんは私より一回りほど上で、色
の白い端正な顔つきは私にやや冷たい印象を持っていた。
それはまた私がそこで認められる充分な位置を占めるほど
の歳でもないこともあったが、決して不遜さのためではな
かった。美しく優しい人柄だった。知り合いでなくてもカ
ウンターの横に座った同志が、マダムを間に入れて話が弾
むと、そのまま友人になることもあった。話題は絵画と文
学が多かった。

誰とも喋らずに一人で飲んでいて帰ろうとすると、「あ
ら、もう帰っちゃうの」と声を掛けられるとその優しい声
に心が緩んだ。太宰治や檀一雄にひいきにされた店だった。
若い頃は小説のモデルにもなったそうだった。

それはお客が少ない日だった。二、三席離れたところに
座っていたのは私と同じくらいの歳の会社員風の男だった。
マダムとゆっくり話が出来そうで嬉しかった。

「こちらは、大杉さんよ」

陰鬱な沈んだ気持ちに変わった。そして狂気の犯罪者たち
の手を思った。その後彼らは家へ帰り、知らぬ顔をして子
を抱き飯を食ったのか。猥雑な権力の命ずるままに従う残
忍な手だ。

パリの女性との写真や、入獄したラ・サンテ刑務所の写
真が少し私をほっとさせてくれた。だが、パリの女性たち
と遊んだり、メーデーで演説して逮捕されても刑務所でワ
インの味を覚え、意気揚々と帰国してまた二ヶ月しかたっ
ていない時、彼は突然の狂気と不条理に襲われたのだ。

「正直なところ、僕の名前では、就職活動には苦労しまし
たよ。大手はダメでしたね。じゃあ、またそのうちに逢い
ましょう」

それで彼とは別れたがその後は会わないままだった。

その後風紋を訪れる度に私は聖子さんから新しい興味の
ある話を聞くことが出来た。幼い頃近くに住んでいた辻潤
や家族のこと、そして彼女がまだ生まれる前にフランスで
絵を描いていたお父さんが林俊衛という絵描きだったこと。
大杉の弟分というより親友だった。彼は社会運動にはた
たのシンパだったが、酒好きと豪放な性格で、十才年上の大
杉栄が何のわだかまりもなく心を許した友人だったこと。
林が絵を本気で描くようになってからの方が、さらに親し
くなったということだった。

大杉のフランス滞在中は、ずっと彼が付き添っていた。林は酒を何杯も飲むが、酒の飲めない大杉はコーヒーを何杯もお替りして、二人でモンマルトルのカフェを巡る。貧しいけれど魅力のあるパリジェンヌとの時間。短い日々だったが二人が心行くまで自由を謳歌した日々だった。しかし大杉はドイツの「世界アナーキスト大会」へ出席するためのビザを待つ焦燥の時間でもあった。五月一日、セン・ドニで行われたメーデーで演説し取り調べられ、パスポート偽造が発覚してラ・サンテ刑務所へ入れられる。林は毎日差し入れをする。食事に出るワインの味を大杉は少しずつ覚える。大杉の「日本脱出記」や林の手記にはそれらのことが生き生きと何の怖れも不安もなく書かれている。しかし彼が日本へ強制送還されたその二か月後、「大杉虐殺」の知らせがパリの林に届く。

その年、私は諸事情があつて帰郷しなければならなかった。特別のこのない、なんの印象も残らない東京生活だった。気の合う友人は少ししかいなかったが、たまたまその一人も帰郷するとの事で、何か変わったことでもしようかと話しあつた。どこか外国へでも行つてみるか、というのが結論だった。その頃はまだ海外旅行などはよほどのことがない限り誰でもできるという時代ではなかった。言葉も自信はなく、ましてやどうすれば飛行機に乗れるのか。

少し高かったが旅行会社のツアーが眼についた。パリ一週間の旅だった。

私の初めての飛行機の旅、初めての外国、夢のように時間が経つていった。美しい街並み、覚えている映画や小説に出てくる建物、通りなど、感激するばかりだった。私の気持ちは大きくなり、世界の中、歴史の中で生きている自分が認められてこれからの人生に自信を持って生きて行けそうだった。

旅立つ前に現実的ではないが、とふと思つていたことが思い出されるともう抑えきれなかった。私はある日友人と別れて一人で出かけた。言葉もわからない、場所もよく知らないのに向かつた先はラ・サンテ刑務所だった。大杉は書いている。

「その翌日、すなわち三日の朝には、十五、六人の仲間と一緒に、大きな囚人馬車二台でラ・サンテ監獄に送られた。・・・」

尊敬するかつてのロシアの革命家たちが刑場へ送られる場面を、彼は想像したのではないだろうか。そして大きな独房で窓が大きく明るいと落ち着いて書いている。今まで泊まったどんなホテルよりも窓が多くて明るいと。帰国して書いた文章なので淡々としている。

「窓からはすぐそばに高い塀が見えて、その上からマロニエの梢が三本ばかりのぞいていた。もう白い花が咲いてい

た」

私はマロニエの花を見たことはない。そしてその時は秋だったのでその花を見ることが出来ないのはわかつていた。

そこへどうやってたどり着いたか覚えてはいない。高い木々の立ち並ぶ長い並木道に私は立っていた。地面を茶色と黄色の落ち葉が遠くまで果てしなくおおっていた。枝にまだ十分に残つた枯葉が晴れ渡つた空の紺碧に映えてまぶしかった。それがマロニエの木かプラタナスの木かは考えもしなかった。その美しさに私は呆然として何をしに来たのか忘れてしまふそうだった。その並木道に沿って、濃い灰色の高い石壁が続いている。私は疲れた足を引きずつてその壁の周りを歩いた。時々その石壁を触ると、なぜか柔らかさが感じられた。あたりは静まり返っている。

大きな黒い鉄の扉と守衛小屋をあまり注視することが出来ずに通り過ぎる。再び長い高い石壁。大きな拳大の石を埋め込んだ土かセメントの頑丈な壁の上から、見張り塔のような屋根が覗き、秋晴れの空を突き刺している。

周りを一周するのにどれだけかかったかわからない。壁の道を挟んだ側にはきれいなアパルトマンが立っている。当時は当然なかっただろう。もつと荒んだ郊外だったろう。近くには天文台があるが、実際の観測施設は移転しているとの事だった。

私は勢いづいて次にベルヴィルのあたりを歩いた。彼が

最初に訪れたパリの町である。フランス無政府主義同盟機関社がそこにあつた。彼は次のように書いている。

「その通りは、浅草から万年町の方へ行くなんかいう通りそのままの感じだ・・・。そして汚いものばかり売っている。日本では見られないような汚らしい風の野蛮人みたいな顔をした人間がうじゃうじゃととおっている。市場なのだ。朝の買い物・・・」

労働者の街に住みたいと言つていた彼はそれでも正直だ。ホテルでも便所が汚くて二、三日我慢したともある。

確かにこの街はツアーで通つたシャンゼリゼやオペラ通りとは全く違う。当時と今は違うだろうが私はそんなに汚いとは思わなかった。下町であることは間違いない。人々は貧しそうを着ているものも粗末だ。そして通りはごみが捨てられて汚れている。匂いも臭い。しかし私は懐かしさを感じていた。普通の住人のふりをして歩くとはいい気分だった。ここも枯葉の残つた並木道だけは整然と続いている。歩いている人々は、いかにもこの街が好きだ、という風に見える。パリにシャゼリゼがありオペラがあつても自分たちには全く関係はないよ、とでも言っているようだった。

日本人には会うまいと決めていた大杉だが、林だけには知らせていた。林は喜んで駆けつける。二人は早速ホテル

を替える。行先はモンマルトルのピガール広場の近く。パリ一番の大衆の歓楽街である。ドイツ行の知らせを待つて二人は毎日毎晩そこで金がなくなるまで遊び呆ける。何年前か前、最初は大杉の演説を聞いた林が彼に会いに行つて意気投合しての付き合ひの始まりだった。しかし二人はあまり社会主義運動についてはもう長い間語らなくなつていたお互いに何の気遣いもしなかった。カフェでぼんやり二人でいると大杉はこれ以上ない解放感に浸ることが出来た。酒を飲み気に入らない者にはすぐにかかる林にとつても年上と言ひながら、大杉を守つてやるといふ使命感もあつたが、それは彼の安らぎでもあつた。革命思想とこの街の淫らで心地よい時間を大杉はどう対比させたのだろうか。若い女性とも仲良くなる。とにかくパリでしか味わえない二人の自由で気ままな楽しい時間だった。そして悲しい思い出になつて残つた。

私はそこには寄らず、セン・ド二へ向かつた。千九百二十三年五月一日、サンシエルの橋の上で、夕方また会おう、と言つて林と別れた大杉はセン・ド二の集会へ電車で向かう。パリの北部の鉄工町でその労働者もつとも革命的で集会は盛大だろうと、大杉は書いてある。ただ電車の中で、一人の労働者が、今日はメーデーの休みなので家族で郊外へ遊びに行く、というのを聞いて腹を立てたりする。

見知りなのだろうか。誰の服も汚れている。男が鼻をかんだ紙をその場に捨てて歩いて行く。

街の広場では市が立つていた。様々な人種が充滿して上る。白人はむしろ少ない。肉や野菜の売り場は満員電車ごみに身をすべり込ませる。肉を叩き切りそのまま売っている。魚の臓物が地面に直接捨てられ飛び散る。饅えた匂いは腐肉のせいなのか、西洋人の体臭か。花屋や果物屋で少しは人波が途切れる。他のテントでは服や靴やカバンや鍋なども売っている。安物の化粧品やアクセサリーを売っているのは派手な原色に身を包んだ大きな黒人だ。

また私はそこで奇妙な人間に何度もあつた。一人は怪我なのか事故なのか見ただけではわからないが、顔の中で眼鼻口がずれてしまつてまったく並んでいない奇妙な顔の男だった。それが平気な態度で歩いている。誰も気にはしていない。その男に私は市の中で二度すれ違つたが、私は慣れることはできなかった。私がその原因を考えても仕方がないことだが、本人はまったく考えてもいないようだった。

三度目のショックにも私は慣れることが出来なかつた。男は、多分男だろう、四足で歩いてた。そして顔が後ろ向きについている。だが彼は平気だ。足も速い。普通の青年の顔だ。彼の生い立ち、生活を考える。まったく想像も

彼は飛び入りで演説する。普段は吃音の彼もフランス語は流暢である。大したことは喋つていない。日本のメーデーについて話す、日本ではもつと町の中心で行う、など二十分ほどだったらしい。それから逮捕される顛末、それを助けようと女工たちが警察署に押し掛ける、などこのあたりの出来事は面白く私は何度「日本脱出記」を読み返したことがある。

私は緊張して地下鉄へ乗つた。懂れのセン・ド二へ向かうこともあるが、このあたりの治安はあまり良くないとガイドから聞いていたからだった。ガイドブックでセン・ド二大聖堂がありそこにマリーアントワネットや歴代のブルボン家の王の墓があるということは読んでいた。フランス革命時、墓は荒されて遺骸遺品など持ち去られたらしい。しかし彼が演説したという労働会館がどこにあるのか、まだ存在しているのかはわからない。

地下鉄の駅で私は最初のショックを受けた。電車は比較的新しいものの、降りた駅は暗く急ぎ足の人ばかりだった。なま臭い匂いが充滿していた。駅のホームでアラブ人らしき女性が座つて物乞いをしている。服からはみ出させている左腕は、肩のすぐ先からねじ切られたように細くなつて無くなつていゝ。葉害なのだろうか事故なのだろうか暴力を受けた傷なのだろうか。傍には汚れた布にくるまつて赤子が眼を閉じている。無視して行きすぎる人たち。もう顔

つかない。悲しみや不幸を通り越してただ生きているのだろうか。怒りは、愛は、肉親は？ 周りの人々は普通にそばを通り過ぎる。

みんな嬉しそうな顔で買い物に余念がない。楽しく笑いお喋りを続けている。花屋からはきれいな花がこぼれ落ちそうだ。スピーカーからは乗りのいい曲が響いてくる。クレープ屋、コーラ、子供たちがはしゃいで飛び回る。群集の底から伝わってくる熱気に私は圧倒される。

彼らはこの市の日を楽しみにしている。今日のため明日のため、いかに安く旨いものをたくさん買うか。他人と押し合う疲れも楽しい。狭い汚い台所だが、今日の夕食は満足だ。

気分が悪い悲しい怒り狂う日もあるが今日は忘れた。憎んだ奴は死んでしまった。熱気が舞い上がる。太陽の光が安物のアクセサリーに反射する。大聖堂の尖塔が秋の晴天を突き抜けている。

私は大杉が彼らを前に演説している姿を想像することが出来なかつた。勿論時代も違い、メーデーでもない。何よりも私が圧倒されてしまつてた。この群集はマグマだ。エネルギーは爆発寸前だ。しかし私には奇妙な冷静さも残つてた。いつかこの怒濤の人民が社会を変革する力になり、それはかつての革命の歴史につながるのか。だが私にはなぜかそう思われなかつた。その時代の渦の中で埋没し

ていく個々の人間の生活がむしろ懐かしく想像できた。この休日を楽しみにして日々を送り、貧しいけれど喜びや怒りに満ちた日々。そして死んでいく個々人、その群集。先刻見た三人の畸形の人間の印象がわたしを捉えて離れないのだった。彼らを愛する者はいらぬのか。彼らが愛する者はいらぬのか。私は申し訳ないと思いつつ、彼らをも当然に醜いと思つた。生きる意味は、その尊厳はなにか。生命の発露は。膨大に膨れ上がった群集の一人一人が私の眼前でその三人へ帰依していった。毎日楽しみ笑い怒り悲しみ不満を言いながら、安い肉と汚れた野菜を食べながら、一人一人は死んでいく。日本人と違う肉体の人間というのが、それぞれ未知の生活と個々の死が不思議な現実感で私を捉える原因だったのだろうか。喧騒と悪臭の中で私はもう考える気力を失つて行つた。全身は悪夢を見た朝のように汗でぬれていた。

郷里に帰つても仕事はすぐになかつた。私は中学の臨時教師の職を見つけた。いざれ正教員になれると思いつつ、いざとなるとそれを希望したわけではない、機会を何度も失つた。

二十二歳のサラリーマンがある文学賞をとつたのが話題になつていた。私も小説らしきものを書いてみた。東京の生活の無為と無味乾燥の中で次第に身をもち崩していくと

も破滅した。作品は非現実の幻想の世界に入つて行きそうだった。そこでは、破滅も美しく感じられるようだった。

○君の店で酒を飲むことが多くなつた。彼は歌もうまく好男子なのに気障なところはなかつた。若い女性も二人ほどいた。客の帰つた後マスターが彼女らを食事に連れて行く時、私もついて行くこともあつた。客はそう多くはなかつた。時は平成に変わつて、あの時の四人を時々見かけることがあつたが、しだいに姿は消えてその話題もなくなつた。経営は決して楽な方ではないようだった。○君は小説を書いていこうと決心したが、見せてはくれなかつた。数年前に奥さんとは別れたらしなかつた。

他に行くところもない私はしばしば開店前に店に入つた。すると数人の中年の女性たちを集めて奥のテーブルで○君のお母さんのルイさんが勉強会をしているところへ出会うこともあつた。ルイさんは小柄な人だった。大杉の死の時はまだ赤子だった。松下竜一という作家が、大杉、野枝の死後のルイさんや姉妹を書いた実録小説が売れている頃だった。私は夢中で読んだ。○君もその中に名前があつた。勉強会には私も誘われたが断つた。著書はほとんど読んでいたし、そのイメージは私の中でじつと抱いていたかつた。そして時々小出しにして○君と語り合うだけでよかつた。自由気ままでおおらかな大杉菜のイメージが私を安らかに

いうありふれたものだったが、ある同人雑誌に投稿して少しの評価を貰つた。職業作家になる自信はなかつたし実力もなかつたが、毎日書き綴る喜びはあつた。不便さを感じなかつたのでずっと一人だった。契約教員だったので教職員組合も避けることが出来た。気ままに暮らすうちに、いつの間にか二十年が過ぎていた。

海外旅行はそれ以来行かなかつた。新しい経験が私に与えるショックが怖かつた。楽しかつた半面、何かに胸を掴まれて引きずり込まれた、あの旅をなるべく考えまいとした。

しかしあの強烈な群集、市場の熱狂の印象が消え去ることとはなかつた。ある時は夢の中で狂乱の賛美の歓声に迎えられるヒットラーの映画の映像と重なり合つた。また、ある南米の国の自然現象の記録映画が浮かんだ。また、何百万というネズミがあちこちから集まり海へ向かつて狂気に駆られ疾走する。そして次々へ海へ飛び込む。また社会に虐げられた闇の中で、そこに安住して個人個人が何の苦しみもなく死んでいく映像。なぜあの記憶がそんな映像へ変化していくか私はわからなかつた。理由のわからない怖れがいつまでもぬぐいきれないのだった。

私の書くものは、次第に独断的になつていった。社会から背を向けて、ただひたすら自分個人に埋没していき、どうしようもなくなるような主人公が多くなつた。個人はどれ

しても、途端に古井戸の瓦礫が襲つて来て私を憂鬱にさせたりした。

研修という名目である夏の日、東京へ出張したことがあつた。短い時間だったが、私には行きたい所があつたので帰りを一日延ばした。北新宿一丁目十六番十七。大杉菜の旧居である。この家を出た後、彼は二度とそこへ戻らなかつた。地図で調べると、JRの大久保と新大久保の間の通りである。私の東京時代は、このあたりはただ薄暗くて連れ込みホテルが小さな灯をつけた下町だった。昔よりは明るくなつた印象はあるが、それでもところどころに赤提灯やけばけばしいネオンの飲み屋があるだけだ。韓国語やアラブ語の店はどれも小さい。その間の闇の路上に人種はわからないが女性が座っている。

私は必死で歩き回り番地を探したがわからなかつた。古い家並みは陽が落ちてしまつたと闇に沈んでしまふ。剥げかけた番地のプレートはもう見えない。やつと目にしても次へ行くともう番地や町名が変わつていく。それでも昔は高級住宅街だったろう。すれ違う人に聞いてもわからない。少し危険な感じもする。いきなり襲われて殺されて闇に引きずり込まれたらもう誰もその行方はわからないだろう。

小さな教会が眼につく。柏木教会、そうだが昔はこのあたりは柏木町だった。私はあきらめざるを得なかつた。それ

でもここまで来たということで満足しなければならぬ。関東大震災の時はまだ東京市ではなかった。このあたりはそう大きな災害はなかった。ただ廃墟の中で多くの朝鮮人が虐殺されたとか、その反撃の集団が蜂起するとか不穏な噂ばかりが流れていた。

大杉はその七月に帰国、凱旋將軍のように迎えられたと何かに書いてある。八月にこの柏木に引越してきた。当時は上級の住宅地だ。「獄中記」を書くものあまり派手な動きはしていない。震災の数日後、彼は生まれたばかりの長男ネストルを乳母車にのせて近所を散歩している。すれ違う男があわてて彼に忠告する。

「おい、大丈夫かい。大杉という反逆者の大親分が、朝鮮人をいっぱい集めて、襲って来るらしいぞ」
彼は苦笑いするしかなかった。

○君には、いつか新宿の「風紋」を尋ねるといいよと言ったが、彼がその気になったかどうかは知らない。それでも私は詳しい地図と電話番号を教えた。またそこで、大杉栄の弟の孫に会ったという話もした。その人の父親と僕の母がいとこですね、というだけだった。昔なにかの記念会で会ったことがあったようで、記憶にかすかに残っているようだった。

友人のKと久しぶりに会うことがあった。彼は学生時代

から反体制運動に身を費やしていた。医学部の紛争がその出発だった。同じ「文芸部」に所属していた長い間の友人だった。私はどちらかというところノンポリであったが、彼は非難も軽蔑もしなかった。ただチクリと刺す口の悪さはあった。今はクリニクを開いていた。小さなクリニクだったが、面倒見がいいのとその優しい人柄で評判はよかった。しかし体制や権力に向かう彼は激しさをむきだしにした。

「ルイーズ」でKと○君を交えて酒を飲むことは、私がいつかそうしたいという願いだ。前にちよつと彼が気分を壊したのでないかと心配していたが、その日が来て嬉しくて、私は夢中で喋った。今まで話していなかった、ラ・サンテ刑務所、セン・ド二のこと、「風紋」や柏木町のことなど、彼に報告することは沢山あった。○君も相槌を打ってくれて話は弾んだ。革命家のシンボルの大杉栄の話はKも喜ぶはずだった。だがKがぼつりと言った。

「まあ、付け焼刃だな」

実際の社会運動に身を挺していない私への皮肉だった。確かにその人物の後を追ひ、イメージだけを楽しむことは、Kにとつてはただの私の趣味に思われたに違ひなかった。たしかにそうだった。いや私が何もしないノンポリなのに、命を懸けて社会主義無政府主義運動に没頭してきた大杉栄を単なる趣味で追いかけることは、むしろ彼の侮辱では

なかろうか。私は、あははと笑ってその場を過ぎす事しかなかった。

しばらくして「ルイーズ」は突然閉まった。○君は何も言ってくれなかった。彼は姿を消した。ピルの管理人に聞いてもわからないとの事だった。

「三」

結局私は長い間、教師のままだった。ある時は二つの学校の契約教師だったり、副職で塾に籍を置いたり、実績を買われて公立高校の夜間の教師も務めた。間違いない真面目な権力には逆らわない教師、それも契約教師だった。まだ先のことは思いながら、そろそろ老後のことを考える歳にもなっていた。貯金をしなければならなかった。

私は熱意のある教師ではなかったが、利発な生徒に出会うとやはり嬉しかった。しかし彼らが夢や目標を語る時、彼らの目が光る時、私はその陰にある、意識していない青年の不安を垣間見、それがかえって私の胸に刻まれるのを感じた。昼間の仕事で家族を支え、難関の国立に入学できた生徒の将来は一応は明るいものだろう。私も祝福で応えたが、いつか彼が挫折する予感がして、誰でも一、二度はあるだろうが、なぜかそれが心に残って仕方がなかった。

挫折して破滅の淵に立ち尽くす青年は美しい、それをぜひ乗り越えてもらわねばならないが。感じないまま、不安にまどわれているから青春は美しいのだ。

中期から初老に入りかけの頃、私はかなりの不安に陥った日々を送った。青春時代に希望にあふれた経験がない分、不安だけが私に身体に巣食っていたのだろうか。いくつもの学校を掛け持ちして、結構時間的には忙しかったのだが、その隙間をぬって不安は私にまといついていた。

私は数十年二DKの部屋に住んだ。本とレコードに埋まり、大型のテレビだけの、長い間片づけもしないままの部屋、それは私の皮膚であり内臓になった。部屋の匂いもそのままで何年も変わらず、そして私の体臭とともに変化した。簡単な食事を作って酒を飲むと睡魔のままに寝入ってしまう。自分のもう一つの肉体に包まれて眠る。休日はずつづだが何かを書いている。何日も何年もそれが続いたのだった。安定した日々だった。満足とは言えないまでも夜は安らぎの時間だった。

だが、ふと目覚める時の真夜中の静寂と暗黒は、不安という言葉だけでは言い表せなかった。眼が冴えているのに、自分の指が見えない。嘔んでみるが痛くはない。頼るものは誰もいない。恐怖ではなく、小さな怯えだった。その怯えに全身が吸い込まれそうで、悲しかった。こうやって自分は死んでいくのか。この安住のはずだった部屋からも遊

離して現実をもちや感じるところが出来ず、誰からも忘れ去られて、存在が消えて行く。この肉が体温が歯が歯が霧散する。消えて行くこの意識は誰も知るまい。理由もなく生きて来たからか、理由もなく存在してきたからか。ただ個人的に生き、個人的に死んでいく。無限の闇ではない、その辺の溝の闇だ。抹殺され捨てられ消える。

だが私は神経を病むことはなかった。次第に鈍感になっていったのだ。老年と言われる歳になってその不安、かつては恐怖であったかもしれない不安から、いつの間にか解放されていた。愛する者や未練のあるものは何もなかった。私から死の恐怖は消えた。安定した安住の部屋だった。大病もなく災害にも会わず、十分に満了した人生だった。避けたいのは死に至る過程だけだった。突然死ぬ年長者や友人は羨ましいばかりだった。

「風紋」の五十周年記念の祝賀会の招待状が届いた。

「風紋」はもうずいぶん長い間忘れていたが、拒む理由はなく上京した。古い由緒ある会場には、「大杉栄伝」を書いたM氏、「太宰治」を書いたI氏、「檀一雄」を書いたN氏や、出版社の編集者などが来ていた。

マダムの子さんは八十歳を越えていたが、まだ色白でふくよかで美しかった。足が少し不自由だったが、何年前の私が同人誌に発表した作品が全国版で少し評価されたの

を知っていて褒めてくれた。

私はもう随分前になるが「風紋」で会った大杉栄の弟の孫に会えると思ったが、顔を忘れてしまっていた。そして私は大杉栄熱から醒めてもう何年も経っていた。そしてその時の一つ一つの出来事を追って行った記憶もほとんど失くしていた。だが、マダムがこう言った時、私の中に一度にこみ上げてくるものがあつた。忘れていた大杉の生きている体の眼と皮膚と体臭だった。彼の記録を辿っていた時には覚えなかった驚きだった。はじめて虐殺の生々しさが蘇った気もした。その悲しみだった。そして私のパリでの奇妙な一日の記憶、熱気と狂気の群集、黄金色の枯葉が秋空を突き抜ける光景、監獄の漆黒の壁「灰色ではなくなっていた」、そして市場の大衆たちが笑い声をあげながら遊び、夕暮れに食事を済ませ静かに死んでいくという不思議な風景だった。

「大杉さんの娘さん、ルイさん、が亡くなって、遺品を整理していたら出て来たので、買ってくれないかという人がいたの。大杉さんが日本へ帰る船の中で、私の父へ書いた手紙だけど、帰国して出す前に亡くなられたから、残ったままだったそうよ」

私にはその手紙を持ってきたのがO君だったかどうかを敢えて聞かなかった。私はぜひと言ってそれを借りた。確かに大杉には船の長旅の日記風の文章はない。「日本脱出

記」には船中で触れ合った人々のことを書いたのはあるが、帰りの旅のことは僅かである。行きは期待に溢れていただろうが、帰りはまた特別の感慨があつたはずである。

質の悪い紙のノートだが、字は滲んでいない。紙は古いがもろさで破れそうでもない。それはほゞ九十年開かれないうまま誰にも読まれず、光に触れなかつたせいなのか。私はその晩ホテルで一氣に読んだ。本当の手紙であるかどうかはわからない。しかし内容は立派なものだった。それが大杉栄の偽手紙であつたにせよ、私はしばらく感動に陥つたままだった。

唯一心を許した弟分の林倭衛への友情、打ち解けた安らぎ、が私の心に優しく浸みた。また今までの著作や文献からはうかがい知ることのできない、彼の内面の葛藤とでもいおうか、煩悶を知ることが出来た。彼への愛憐の気持ち私を襲った。私の心が手紙の一行一行に共鳴した。私は初めて彼が理解できたと思つた。そして自分が手紙を書いている錯覚に捉われた。

「四」

千九百二十三年六月x日

六月三日の早朝、マルセイユを出港した。遠ざかる港を

見ていたら、活動に十分燃焼しきれなかつた悔いと、君と過ごしたモンマルトルやリオンの怠惰な日々が懐かしくたまらなかつた。それにしても何と心地よい日々だったか。港の右手の丘の小さな教会が次第に遠ざかり消えて行く。そして周りは海だけになった。

フランス追放なのに、領事が二等船室を用意してくれた。勿論借金だ。ラ・サンテ刑務所で覚えたワインの味と若干の船酔いで二、三日ぼんやりしていた。デッキに出ても国へ帰る中国人留学生たちの談笑がうるさくてゆっくりもできなかつた。

日本へ帰るまで四十日。日本出国、上海、フランス入国、追放などの半年の報告はいずれ東京へ戻ってからゆつくり書くとして、この船旅の日記を君への手紙として書こうと思う。ただ、今日は何日かわからない、数日たったことは確かだ。

林君、君には世話になった。この騒動、大したことでもないが、君を僕の入獄の巻き添えにしなかつたことで少しは安心した。強制送還さえなければ、君が経験しても悪くはなかつたらうが。実際、監獄へ入るまではさんざん殴られたり蹴られたりしたけれど、中では待遇は悪くはなかつた。部屋は広いし食事にはワインも出る。退屈さの余り少々感傷的にはなつたけれど。君が毎日面会に来てくれたのはありがたかつたが、あとで聞くと君と僕のことを結構悪

くいうやつもいたそうだ。Y新聞のM氏などは、あれでいい気になってるのはどうかと思う、とかいう記事も書いてたらしい。まあ構わないでいいとは思う。

マルセイユまでの汽車にのせられ、着いたら警察署へ行くと言われたが、そこからどこかへトンズラしようかとも考えたよ。実際実行しようと思っただが、家からの手紙が帰らねばならない事情を伝えて来ていた。それで大人しく帰ることにした。

残念だった。スペインやポルトガルあたりに勝手に行ってもどうということもなかったろう。また南フランスのローヌ川を越えて、アビニヨンとかいう町の近くに、ファールブルに住んでいた家があるそう。そこにも行きたかった。今、翻訳中の彼の「昆虫記」はまだ一巻目だけだ。それも先に進めたい。

パリでは君にお別れを言えなかったのが残念だった。また君がいつか連れてきた、ちよつとしか会えなかったがあのイヴォンヌという女性にも最後に会いたかった。彼女が妙に恋しい。西洋人らしくなく小柄で、つつましやかだった。遠慮することはない、帰国するときは子供の二、三人でもつれてきたらいいよ、野枝に面倒見させるよ。

船は地中海の真ん中だろう。紺碧の海と空の中を船が進む。空と海の境がなく、水平線は見えない。大げさに言えば、船は一羽の純白の鳥になってそのなかを漂っている

でも言おうか。あるいは昔から地中海はワインの色、とも言われたが、時々本当にこの深い青が深紅のワイン色に見えることがある。後で考えるとなにかセンチメンタルな気分になった時に感じるようだ。

六月x x日

スエズ運河を越えると、海が一変する。海というより太陽の強さがあたりを変化させるのだろう。船の傾きで黒く濁った色になったり、銀色の光で目視できない色になったりする。

船はジブチという港へ寄った。どこかへ任官する予定の士官の妻が女中を従えて見学に降りた。ジブチがどこの国か僕は知らない。古い漁船や帆船や修理中の船が数隻停泊している。岸壁の先は赤土の荒野で、空の青さとくつきりと一線を成している。その先に兵舎のような建物が並んでいる。黒光りする皮膚の土人たちが食糧や水を運びこむ。修理中の船の周りを白人の技術者らしきものが忙しそうに動き回っている。フランスへ向かう時の旅もここに寄ったのだろうか。全く覚えがない。

フランスでの六か月余りでなにか僕は感覚が変わった、というより何かがずれてしまった、という気がしている。確かにフランス行の旅程は緊張していたし、気の合った中

国の青年、はつきりと中国共産党を名乗り勉強に余念がなかった青年と議論を交わしたりしていた。また任期を終えて帰国する酔っぱらいのフランス兵と語学の勉強をかねてふざけたりもしていた。

勿論、帰国したらしないで、やらねばならないことは沢山ある。だが、アジ演説をする自分を想像してもなにかよつとした空洞を抱えているような気もする。そしてそれを埋めるためにさらに声を上げる自分が見える。

パリの本屋で古いのを見つけてそれを日本への土産としている。一つは、ローザルクセンブルグの「獄中手紙」だ。ドイツ語では発禁らしいが、だれかがフランス語に訳している。下手な印刷の本だが、これは野枝への土産にする。最初、ローザルクセンブルグの写真を渡した時の彼女の嬉しそうな顔がまだ消えない。野枝は辞書を引きながら自分で読むだろう。出版できればいいが。彼女は、ローザを悲壮感に満ちて厳しく美しい顔をしていると言っていた。ドイツ共産党の活動をしていた彼女は弾圧の末、銃床で殴り殺されライン川に投げ込まれ、六か月間もそのままにされ見つけられた時は腐乱していた。まだ中年の美しい女性だった。

この「獄中手紙」を読んでいると、僕の共感するところが多い。政治的なアジ宣伝の言葉は検閲でカットされるに

しても、植物収集のことがたくさん書かれている。そして明るい女性だ。いつも瞳が輝いている前向きなのびやかな女性だ。植物学者になりたかったとも書いている。獄中で熱心に読むのはドイツ文学全集。そして獄窓の外の小鳥の様子などの描写も美しい。僕もいずれもつと生物学を勉強したいと思っている。

また、激烈な反体制運動と権力闘争の果てに無慙に散ったローザと野枝を比べることはおかしいが、僕の心に残るものは似ている。二人の物おじしない明るさでも言おうか。ローザは虐殺され完全に意識を失うまで、希望は捨てなかつたに違いない。将来もし野枝にそんなことがあつても、前を見つめる目の輝きは同じだろう。

もう一つは、不思議な本だ。「アフリカの詩人」という印刷の悪い薄い本だ。不思議な詩が一編と散文のような詩が一編だけ載っていて、その短い人生が紹介してある。

「言葉、母音」を色に変えて、読むものを錯乱させるような奇妙な詩だが、音節や韻でしつかり構成されている。もう一つは「地獄の季節」という散文。僕の辞書にない言葉もあつてわかりにくいところもあるが、既成のものへの激しい反抗心と、自らを狂気に追い込みその果てにしか真の美は見つからないと、呻吟し叫んでいる。アルチュール・ランボーという詩人だ。少年の顔をしている。

それよりも僕の興味を引いたのはその人生だった。十五、

六歳から素晴らしい詩を書きながら二十歳を過ぎると突然止めてしまう。二十七歳の時に姿をくらまし、アフリカに渡る。それから十一年間アフリカに住む。砂漠の闇に潜むように時間が唯過ぎるのを待つ。彼の昔の詩が母国フランスでセンセーショナルな賞賛を受けているなど知らない。武器、コーヒール、皮革、定かではないが奴隷、等の商人として生きるが、ぼろぼろの体でマルセイユにもどる。癌で膨れ上がった片足を切断し苦悶のうちに死ぬ。彼の心の虚無に巢食っていたのは希望なのか絶望なのか。三十二年前千八百九十一年のことだ。

その彼の最初のアフリカでの仕事場がこのジブチなのだ。ことイエメン、アデンなどを行き来しながら次第に大陸の奥へ進んでいく。砂漠と闇しかない世界へ疾駆する、かつて真の美を獲得するために錯乱と狂気に自らを投げ込むべしと謳ったように。

ある数行がまた僕の目を引く。「俺は旅をして、…：海の上に、俺はその海をあたかもそれが俺から穢れを洗い流してくれるものであるかのように、愛していたのだが、その海の上に慰めの十字架が立ち上がるのが見えた。俺は虹によつて墮地獄の刑に処せられていたのだつた・・・」

マルセイユ湾に入っていく船には瀕死の彼が横たわっている。十一年ぶりの母国だ。右手の丘の上には教会が小さく見える。十字架が太陽に反射して光つたのだろうか。彼

はそれを見たのか。十年も前に書いた詩の一行はその予感だったのか。僕はその反対に遠ざかっていく教会を眺めながらマルセイユを発つたのだ。

また十六歳の彼がパリ・コンミュニオンに参加したかもしれないと書いてある。どれだけの仕事をしたかはわからない。逃げ出したとも書いてある。破壊と殺戮の歴史の中でなにかの啓示を得たのだろうか。そこで彼は少年を脱する。何かを見た。そして暗黒と瞬く光の未知の世界へと飛び込んで行く。

僕は昔書いたことがある。「秩序は僕らの真の死である。紊乱はまさに真の生である」彼にはこの一行もある。「道徳は脳みその衰弱だ」

この死海を過ぎるといよいよインド洋だ。

六月x x x日

少年詩人の記録を読みながら、しばらくはそのイメージを追いかけて、彼への想いに浸つた数日だった。なかなかの美少年だ。林君、そのためでもないが、いやそのためかもしれないが、君と知り合つた頃を思い出した。植字工をしていた君が、僕の演説会に来たのは僕が千葉刑務所ですてしばらくしてからだった。ピラを印刷する字を拾っているうちに、胸の奥から力が湧いてきた、と君は言った。そ

れからしょつちゆう集会に出て来るようになった。君はまだ二十歳にもなっていないか。年の割には老けていて、というより大人びた風貌をてらつていた。早く大人になりたいとでもいう風だった。そして何かの折にはいつも傍にいてくれた。大杉さんの用心棒だ、とどこでも言っていたらしいな。酒もよく飲み、体はそんなに大きくなかったが、喧嘩早いのと純粋な性格が感じられて君を嫌うものはいなかった。

君は石川啄木が好きで、出版されたばかりの歌集をいつも読んでいた。気に入った歌に出会うと、僕にもその感想を聞いてきた。会つたことはなかったが、僕も啄木は好きだった。その評論「時代閉塞の現状」があると聞いて読みたかったが、そのままだった。僕がまだ千葉刑務所にいるころだが、「大逆事件」を相当に調べて、でっちあげだと新聞紙上に発表しようとしたが叶わなかったと聞いていた。

僕が出てきてちよつとして石川啄木は死んだ。その時の君の悲しみよりは、まるで身内の死を悼むようだった。僕は彼の死が与えた空白を埋めてやらねばという気持ちにもなった。君はその通りに僕にぶつかってきた。君を弟、いやそれ以上に感じ始めたのはそれからだった。しかし君はあまり勉強しなかった。まあ、労働者がみんな社会主義運動を熱心に勉強するということはないがね。僕の新聞を読んで質問するよりも、啄木の歌をいくつ暗記したか、どん

なに感じたか、そればかり聞かされた。しばらくして、会合である絵描きに会つた時にそれはわかつた。彼が君の絵を褒めたのだ。まだ未完成、当然だがまだまだ上達する資質がある、と。僕は君が絵を描くとは知らなかった。理論よりも感情の湧き上がり君にとつては一番大切なことだったのだ。そのくせ何か恥ずかしいことのように僕に隠していたのだ。もう君と付き合いたしてから大分時間も経っていた。その通り、君の絵を初めて見た時、僕は感動した。大人ぶろうとしているけれど、君の若い体から噴出する汗をそのまま画布にぶつけるような情熱が感じられた。僕は即座に言った。本気で絵描きになれ、他のことはするな、俺のそばにいても何にもならんぞ。そう言いながら君が僕のそばからいなくなる不安で一杯だった。正直なところ、君がそれからしばらく来なかつた時は淋しくて仕方がなかった。

ちよつと前に読んだ有島武郎の小説を思い出していた。「生まれ出ずる悩み」だったかな。良くは覚えていないが、絵にのめり込んでいる貧乏な学生が、一途に生きていくのだが、成功はせずにそのまま終わってしまう話だったよ。うな気がする。僕は自分の淋しさもそうだが、君が心配でならなかつた。しばらくして君が来た時はほつとしたよ。君はすっかり青年になっていた。遅くさえあつた。その時から君は僕の本当のまた対等の友人になった。運動の仲間

たちよりも、君のほうが信頼でき僕の素直な気持ちをつぶけることが出来そうだった。また僕の弱みをさらけ出して君に甘えて寄りかかることも出来そうだった。

僕が神近市子に葉山の旅館で首を切られた後、たつた。傷は癒えていたが、僕の評判は地に落ちていた。神近への同情、夫と子供を捨てた野枝への不信任感、僕の評論まで表層的だ、剽窃だ、ペダンティックだ、と悪口は後を絶たなかった。その時現れた君の、大人になった肩や顎や咽喉仏ほど頼りになるものはなかった。

今は君と過ごしたあのモンマルトルのごみごみしたカフエが思い出される。汚い通りが懐かしい。そして決して美人ではないが、精いっぱいおしゃべりした愛想のいい女の子たちにまた会いたい。あの怠惰な時間が懐かしい。街中のプラタナスの並木の緑が陽に映えて、白やピンクのマロニエが公園を包む。小さな広場では桐が紫の花で空をさえぎる。もう二度とあの時間は帰ってこないだろうな。君はいつも酒を飲み、僕は何杯もコーヒーを飲んだ。美味しかった。これからもコーヒーの匂いを嗅ぐとあのごちゃごちゃした界限や、丘の寺院の前からみたパリの全景を思い出すだろう。淫らな女たちと花々が乱れて混ざってコーヒーの香りから匂い出てくる。そして悲しそうな君の恋人、イヴォンヌの顔も浮かぶ。君がいつか僕のように一人で港を後にして海上にいる時、残された彼女は、と思うと僕まで

悲しくなる。コーヒーの香りは懐かしさ以上に悲しみを誘う。

六月 x x x x 日

君と政治の話をしなくなって久しい。それを残念だと思わないのはなぜだろうか。君の目指す芸術の果てには、絶対の美があり、それを作る、あるいは見ることでできる、個人の昂揚がある。社会主義運動もそれと同じだ。個人の感じる感動の発露が自由に味わえる社会を作ることがこの運動なのだ。それを貪欲に希求するのが若さの特権だ。

僕はもう四十歳に近くなった。いろんな組織にいる大御所のようになりたくない。フランスにはその大御所が多い。なぜなら左翼や急進思想派は、戦争で一番激しい前線にやられる。拒否するあるいは脱走する以外は生き延びるしかない。拒否、脱走も場合によっては死罪だ。どちらも生き延びるのは難しい。前の大戦でヨーロッパで数百万人が死んだ。多くの優秀な若者たちが命を開花させないまま消えて行った。

リヨンとパリのアジトで出会った二人の優秀な青年を忘れることが出来ない。中国の留学生だった。その一人、周恩来とはリヨンのアジトで会った。背の高い好青年で礼儀正しかった。君と同じくらいの歳だ。彼は中国共産党フラ

ンス支部を作った。饒舌ではなく短い言葉で適切に話した。満州国の清国を倒し孫文の国民党が政権をとったが、将来はこの数億の国民をまとめるには共産主義しかない。長い時間がかかるかもしれないが、共産主義の極致は自由な世界になるだろう。彼は仲間の信頼を得ていたが決して驕つてはいなかった。彼が故国で活躍するのをいつか見る事が出来るだろう。その時にはまた会おうと僕たちは握手を交わした。

もう一人は周と違ってまだ少年だった。眼と頭が大きく背は低かった。登小平という名前で二十歳前と言っていた。労働者不足のフランスに来て三、四年経っていた。言葉は流暢だった。清掃員、ボーイ、など苦しい仕事をなんでもこなし中学校を出ると、郊外の自動車会社で働いていた。明るく人の言うことを何でも信じるので誰からも好かれていた。彼は仲間たちと話す未来に何の疑問も持っていないかった。機関紙の発行のガリ版の係りだった。そこでかなりの漢字を覚えたと言っていた。

彼らが母国ではなく海外で組織をつくりその運動を広めていくのが面白い。僕はここで失敗したが、失敗とは思いたくないが、次々に日本の若者が出てきて活動する日を望んでいる。

六月 y 日

ロシアは革命のあとまだ混乱が続いている。内戦はまだまだ収まりそうにない。船では若いロシア人と話す機会も多い。彼らとはよく内戦について話をした。多くが反革命軍に加わっていた。帝政復興とかの思想のためではない。では何のために、と聞くと、労働者と農民の政府と言いながら、農村に食糧の強制徴発にくる。応じないと懲罰隊が村を焼き払う。男は殺される。その暴挙に憤って反革命軍に入るとのことだ。そして逃げて来ている。そのまた復讐が始まる。またその復讐の復讐。その連鎖で内乱は終わるそうにない。

君にロシア革命について講釈するのではない。マルセイユだったかりヨンだったか、退屈しのぎに一度ロシアの芝居を見た。ロシアでは上演禁止という触れ込みだったから必見だと思った。しかし見た後の後味が悪く、どうしようもない気持ちになった。テーマもよく分からない。主人公は若いし、君に僕の何とも知れない気持ちを知らせてもらいたくて話す。

グルジアの作家の「崩壊」という芝居だった。主人公は二十歳、貴族の地主で、当時の流行りのインテリゲンジャ弱々しい正直な男である。革命の気運が高まり、不穏な噂も流れてくる。彼は一大決心して、自分から農地を解放す

る。時代と闘う勇氣はないし、農地解放が時代の正しい流れであるのでは、とも思っている。矜持だけは持ち続けても財産はすでに無くなってしまふ。食うものにも事欠くようになる。力のある農奴の一人がその貴族の美しい妻を奪う。妻は反抗しながらも一杯のスープにありつけなければいいと思う。その農奴が土地を支配する。絶望した主人公は土地を捨てて、放浪の旅へ出る。数年して戻ると、その農奴は失脚し、妻は子供を抱えてその農奴とともに貧窮の生活を送っている。

革命を賛美していかないのが面白い。反革命でもない。やりきれなさだけが残る。この芝居の意味はなんだ。君と一緒に見ればよかったと思っている。上演禁止というのもわかる。作者はかなり若いということだ。こんな風に時々若者が僕を追い越して先へ進んでいく気がする。少し焦燥感に陥ることが多くなったこの頃だ。

六月yy日

船旅も半分くらい終わったようだ。少々疲れた。連日暑い。僕は少しの酒で眠ることが出来るのでそれは都合がいい。ただ前の日に早く寝てしまふと翌日に早く目が覚めて困る。

それで気持ちを切り替えて、夜明け前と夜明けを楽しむ

な嫌な場面は何度も見た。

英国領やオランダ領でも同じだ。ただ、あまりに威張る西洋人の主人が突然道端で倒れることがあるらしい。どこからともなく飛んできた毒矢が首に刺さる。部落中の秘密は絶対に外へは出ない。また、ちよつと進んだ国では賃銀労働者の土人の組合騒動もあつたらしい。勿論すぐに弾圧されたということだ。黙つて見過ごすわけではないが、一つ一つに関わることはできない。

林君、君は今頃あのカフェで赤いワインを飲んでいるのか。イヴォンヌの肖像画は出来上がったか。長旅は少々疲れる。

六月yy日

暑さと退屈さで頭の中が朦朧としかかる時がある。奥歯を噛みしめて頭を振ると少し収まる。錯乱することはないだろうが、幻影でも見えてきたらそれを楽しむしかない。

思えば、ラ・サンテ刑務所の部屋にいる時の方がもっと退屈だった。厄介なのは妙に感傷的になることだった。普段はそんなものに囚われる自分ではないと思つていたのに意外だった。刑務所はこの客室よりも涼しく、静かだった。いろいろそこで見聞きしたことをまだ君に話していないこ

ことにした。
さすがに夜明け前の甲板は涼しく気持ちがいい。見回りの船員が不審そうな目で見るが慣れてしまえば双方どうってことはない。

そして朝焼けがこんなに美しいものだとは長い間忘れていた。まず空が水色に透き通つて来るが、いつの間にか薔薇色に代わっている。それでも大抵は雲に隠れて太陽は現れない。突然現れる太陽は巨大な深紅の玉である。燃えている。それも束の間で、ちよつとでも目を離すともう空全体が真っ青な夏の色になっている。

気持ちのいい朝はこれで終わる。あとはグループごとのお喋りが喧しい。そして嫌なことだが、人種偏見を眼にすることが多い。あるポーランド人が支那人の労働者を怒鳴りつける。人間じゃないんだと怒鳴る。するとロシア人が来て抗議する、双方で議論が始まる。だがそのロシア人もユダヤ人を見ると、まるで見向きもしない。泥棒をしたらしい支那人を西洋人が血だらけになるほど殴りつけているのを見た。しかしまた支那人が下働きの同国の苦力を殴つたり蹴つたりするのも見た。

安南の港で下船して歩くことが出来た。安南人は貧しく汚かった。ちよつとしたところでは印度人や支那人が威張っているが、フランス人はもつと大きな態度をとる。そして安南人も留学より帰国すると同国人に威張る。このよう

とがある。

ラ・サンテ、ここは未決囚とか政治犯には寛容なところだ。外部のレストランから料理をとつたりもできる、金があれば、であるけれど。そして看守なども日本のようにしよつちゆう見まわりにも来ない。運動、掃除、食事など決まった時間だけだ。壁の落書きなども長い間消されてもいない。僕もついでにペン先で強く彫り込んだよ。日本無政府主義者 大杉栄とね。

またいろんな情報も入ってくる。面白かったのは、最近わりと若くして死んだ詩人、アポリネールを知ったことだ。詩は君の差し入れて読んだ。それは甘つちよろいけど、詩としての響きは悪くないものだった。結構色男で何人も女性に詩を捧げている。「ミラボー橋の下に」という詩だったかな、それが面白いことに、彼も若い頃ここサンテ刑務所にしばらく入っていたらしい。彼の仲間たち、芸術家崩れの不良青年ばかりだったろうが、ルーブル美術館から「モナリザ」という絵が盗まれたらしく、その青年たちが一斉に捕まった。一週間ほどで無罪が証明されて釈放されたらしいが、いい経験だったろう。モンパルナスにたむろする不良芸術家崩れたちが直ちに疑われて、逮捕される、なにかフランスらしい楽しい気がする。千九百十一年のことだ。

だが別の意味で、その年のことは忘れることが出来ない。

年明け早々に幸徳秋水が縛り首にされた年だ。秋水の恋人の菅野須賀子とほか十名の計十二名。世間では明治天皇暗殺計画の大逆事件と呼んでいたが、今ではそれが濡れ衣事件だったと誰でも知っている。この事件がなかったら、僕はそのあとどうなっていたかわからない。もつとポーとした日々を送っていたかもしれない。運動にしても秋水の下で、荒畑なんかとも決別しないでいただろう。その時僕は千葉の監獄にいたから秋水の仲間と認められずに縛り首は免れたが、相当に危なかった。僕も間違ひなく一緒にやられると思っていた人は多かつたらしい。僕も東京監獄に移され、かなりの尋問を受けた。

林君、君はこの頃まだ十五、六歳だからこの事件をどれだけ知っていたか、君と話したことはなかったが、もし僕もやられて居たら君に会うこともなかったな。

今も忘れることはできない。死刑の前の年に違いないが、僕の獄室の前を通り過ぎる彼らを見たのが最後だった。囚人服で手錠と腰縄の彼らは編み笠のようなものを被っていた。その静かで整然とした歩調は、もうすでに死刑の判決は降りていたものの、叫ぼうとする僕の咽喉を抑えてしまった。その中に、見覚えのある体つきが見えた。それが秋水だった。一度に懐かしさが込み上げてきたので呼びかける僕の声は小さかった。僕は、秋水、秋水と小さな声で呼びかけた。彼が気づいたかどうかさえ分からない。そのま

に、その時は彼の家に居候していたらしい、酒を買ってこさせて一人しんみりと飲んでいたらしい。神近が僕に話してくれたことがあった。

もう一人は与謝野晶子だ。逮捕される前から病気で臥せていた菅野須賀子が、監獄でも臥せていたらしいが、晶子の歌集が欲しいと言ったそうだ。死刑の判決の後だ。彼女の反戦歌を読みたかったのか、女性の生身の情熱を顧みたかったのかわからない。面会に行った人が、やや吊り上ったうるみがちの目に微笑をたたえ、美しかった、と書いている。晶子が幸徳秋水を嫌っていたので、須賀子の気持ちをだれも晶子に伝えなかった。後でそれを知った与謝野晶子は、自分が直接差し入れに行かなかったことをえらく悔やんだそうだ。

六月2日

海の色が変わった。なぜだかわからないが東洋の海の色だと思ふ。緑色をしている。あと十日くらいで日本に着くだろう。残りの行程が短くなると初めの頃より、待ち遠しさに日々が長く感じられる。そして精神が不安定になり、恋しいものに早く会いたいと思う反面、それを避けたい気持ちも出てくる。苛立ちだつたのだろうか。

毎朝、甲板に出る。白々と夜が明けてくる。風が首筋を

ま彼らは行ってしまった。ああ、その時僕は何故もつと叫ばなかったのか。一生残る悔いだ。歳は僕より十歳以上上だったが友人のように付き合ってくれていた。ぶつかつていく時、彼は兄貴のように受け止めてくれたものだった。

小雪が降る夕方、赤レンガの東京監獄の裏口から運び出された棺桶は無造作に毛布に包まれたり、荒縄で括られたりしていた。僕は友人と落合の火葬場までついて行った。その後ほんの短い時間だけ秋水の顔を見ることが出来た。頬は痩せて顔は作り物のようだった。本人とは信じられなかった。僕は冷静だった。これはもう語りたくない。

君と会ったのはそれからしばらくしてからだった。秋水が僕を見ていたように、僕は君を弟のように見ていたのかもしれない。僕は二年ほど監獄に入っていたから、あまり人としやべる機会がなかった。そのためか監獄を出てからほとんど喋れなかった。吃音が前よりひどくなり、面倒なのでノートを持って歩いたくらいだ。た、た君と会うとなぜか違つた。君の屈託のない笑い声はいつも僕をなごませてくれた。君の前で吃音があまり出ないのが不思議だった。

死刑の後、たくさんの知識人たちが論評を出してくれた。君の好きだった石川啄木、徳富蘆花、森鷗外などが、二人ほど君に記憶してもらいたいのがいる。一人は今はずりのあのなよなよした女を描く、絵描き、竹久夢二だ。死刑を知った日、彼は長崎から出て来たばかりの若い神近市子

ひんやりと撫でていく。先の方に灰色の海が姿を現す。波間に何か漂っているのが見える。秋水の棺桶だ。それが消えると朝靄の中に秋水の顔が揺れながら浮かぶ。眼を閉じた木彫りのような静かな表情。少し伸びた髪が生命の名残を感じさせる。秋水よ、何故叫ばないのか。怒りや憤りはどこへ行つた。悲しみはないのか。愚劣な権力に侮蔑され圧殺されたのに、その静かさはなんなのか。無実の罪で恥辱を受け、縛り首にされ、それでも堂々と死んでいくことが、究極の反抗なのだろうか。薄暗い電灯の下で見た首に残る紫色の帯の跡が思い出される。苦しくはなかったのか。反面、獄中で自死したTの苦悩に歪んだ表情が浮かぶ。助けを求めてはいない。苦痛をわが身に一人背負うことで怒りの頂点に立ち、何かに反逆しているのだ。彼の心中を思うと僕は涙を抑えられなかった。友人の死を前にして泣いたのはその時だけだ。

その合間に大きな瞳でこちらを見つめている西洋の女性が浮かんで消える。ローザか。僕は頭を振って意識を取り戻そうとする。

僕の頭は錯乱し衰弱している。その薄闇の波間に、なぜか自分や野枝の死体が流れていくのを探す。目を凝らしても何も見えない。と、あたりはもう明るい太陽に晒されている。僕は気が呆けたようになる。毎朝その繰り返しだ。

書いておきたことがあるが、どう書いていいかわからない。あれが何だったのかいまだにわからない。あれは幻覚だったのか。そうだ、今思うとあれは現実ではなかったのだ。

その時、僕は既決囚だった。お金もなくなれば食事も囚人食だ。あまりの不味さに二、三日なにも食わなかったこともある。そのため僕は貧血でふらふらしていた。

最初の頃、僕は日本の監獄と西洋のそのの違いを観察する余裕があった。簡単にはわけられないとは思うが、日本のそれが「静」とすれば西洋は「動」だろうか。日本では暴れる者もいるが大体において忍従を強いられる。忍従に耐えることは一種の反抗、反逆である。縊死は絶望の末だけではない。怒りの犯行なのだ。西洋の「動」というのは、脱獄が何度も繰り返され、奇想天外な方法がその都度あみだされることもある。そして個々では激しい内部への行動に出る。僕が驚いたのは、もちろん既決囚で長い刑期を宣告されたためだろうが、木製のスプーンや石のかげらを飲み込んで病院へ運ばれるときに誇らしげな顔をしている囚人を見た時だった。またどこで手に入れたか解明されなかったが、自分の男根を剃刀で切り落とした男もいた。単に狂っているというだけでは済まされない。そして自死するものは少ない。

僕の独房の格子の隙間から、斜め一杯の方向に目をやる

僕を驚かせたのは、長さばかりではない、音節の流れの良さ、韻の響きの良さ、そして殺人の死刑囚を賛美するその言葉の暗い美しさだった。彼は前書きに書いている。

「私はこの詩をわが友Mに捧げる。彼の体と晴れやかな顔は、眠られぬ夜毎の私につきまとう。足に鎖を付け、時には手錠もはめられて刑務所で過ごした数日を私は心の中で彼とともに思い出す。彼をよく知り愛しもした私としては、あらん限りの優しさと愛情を込めて、魂と肉体の二重にして前代未聞の光輝の故に、彼こそまさにあのような死の特権を得るにふさわしかったのだと断言したい」

「彼が私に言ったことがある。おまえさんの屁のツツパリにもならん人生なんて、俺が背負って死んでやらあ、と」僕が何故こんな話に印象つけられ、忘れられず、今頃思いつくのかかわからない。僕の疲れが深層に残った不可思議さへの興味を引き出してきたのか。彼らはおそらく、ではなく間違いなく社会の底辺で生きてきたのだろう。その泥濘の中でしか存在の意味を見つけられなかったのか。悪と汚物の極致がその意味なのか。そこで誇らしげに死んでいく。僕には憐れとしか見えないが、反面理解できないわけでもない。僕の心の隙間に彼らへの興味と、引きずり込まれそうな怖れが忍び込んでくる。

彼らは救われたいと願っているのか。彼らを救うべきなのか。彼らを健全な市民に、実直な労働者に教育するべき

と一人の死刑囚の独房が見えた。彼はまた二十歳の美青年だった。ある年老いた高利貸しの別荘を襲い、金品を強奪した。男娼の恋人に贈り物を捧げるためだった。だが彼はその青年を裏切った。彼は喉を切り裂かれた。

毎朝、手錠をかけられたまま僕の部屋の前を通って行く囚人がいた。彼と目が合った時、僕は思わず配給の煙草を差し出した。獄吏がまるで客人を迎えるような丁寧な態度で彼に対応していたからだ。彼はJ・Jという名前だった。

J・Jは毎朝、特別の計らいで数本の煙草をその青年死刑囚へ届けるのを許されていた。彼の美貌と不遜な態度にJ・Jは魅入られてしまっていた。J・Jは強請、泥棒、詐欺とあらゆる犯罪に手を染めた男娼だった。眼は少し垂れていたがその深い光は僕に畏れを抱かせるものだった。大きな体は闇の中からゆっくりとその姿を現してきたともいうようだった。

J・Jが部屋に着くと青年は鼻歌交じりに起きてくる。おはよう、早起きだな、というのがその一声だった。J・Jは煙草を捧げる。じつとその顔を見つめる。数日後に彼には斬首の刑が待っている。

僕はJ・Jが詩を書いてその青年の死に捧げたのを後で知った。読む機会があったことは僕には幸いだった。死刑囚Mに捧げるという題の、二百行にも及ぶ長い詩だった。

なのか。彼らは間違いなく拒否するだろう。彼らは僕たちの知らない世界で、その真理を求めていることだろう。そこには後ろめたさなどない。存在の意味を実感するために悲痛感もない。その極致は彼らにとっては神々しいばかりに闇の中で輝くのだ。

一般の世界では、犯罪者はいかなる動機にしろ加害者であるが、彼らにとつては犯罪者こそ受難者であり殉教者であるのだ。彼らは自らその殉教を欲し、悪事の極致に上り詰め、のた打ち回る虚無の泥沼から脱出する。その時はじめて存在の意味を理解しそれを享受するのだ。

すると果たして僕は犯罪者なのか。僕はどちら側の人間で、何の犯罪者なのか。僕の極致はどこなのか。

僕が妄想に取りつかれているのが自分でもわかっている。疲れのせいなのだ。海は次第に濁った淀んだ緑色になっていく。労働者を前にした演説を思い出すと、その後の疲れが先に感じられる。帰れば忙しくなるだろう。壇上に立つ僕の胸に空疎な空間が巣食っているような気がする。

日本へ着くまでひたすら寝て過ごすしかない。

七月十四日

七月十一日に日本へ着いた。この手紙を投函したらしばらくは忙しくて君とは御無沙汰になるだろう。船がつくと

僕はすぐに引つ張られて何時間も取り調べを受けた。相変わらずだ。何もないうまま、記者会見に出たが丁度いい新聞ネタになっただけだった。「凱旋將軍の都入り」とまで書かれたがそれだけの話だ。娘が急に大きくなっているのは驚いた。野枝のお腹もだ。ゆつくりする暇はない。今は前々からの借金の整理、や今回の借金の整理で夜も忙しい。その上、これからの生活費をどうするか考えねばならない。

今日はフランスでは革命記念日だよな。仕事は休みで街中が飲んだり踊ったりして楽しく騒いでいるだろう。君とイヴォンヌは何をしているかな。もうバリは暑いだろう。シャンゼリゼの軍の行進は見たかな。大戦で多くの若者が死んだ、戦争には反対するが死者には哀悼の意を表さねばならないだろう。

集会、座談会、研究会の出席を連日求められている。九州工業地帯へも行かねばならない。去年の八幡製鉄の記念会の演説を思い出している。大歓声はまだ耳に残っている。これで手紙は終わりだ。君の才能のさらなる開花を待っている。では。

ここまで書いて投函するのを忘れていたら、ニュースが一つ飛び込んできた。これは君にはぜひ教えたい。僕はシヨックを受けちよつと憂鬱になった。

な瞳は血で染まり頭は割られ、無造作にライン川に投げ込まれたのだ。六か月間ほっておかれて腐乱した、誰の死体ともわからずに。ただ長い髪は藻のようにラインの流れに漂っていたことだろう。

僕はどうしてもこの個人個人の死を考えてしまう。それぞれの死を考える。すべてのものは誰かに、何かに殺されるのだ。権力に、あるいは自然というものに否応なしに殺される。不条理に愛撫されるように抹殺される。主義主張が、生きている喜びがその無慙な不条理を払拭はしてくれない。僕たちは様々な方法で殺され、様々な形で死を迎えるのだ。今僕の脳裏を逍遙するのは、反逆を貫いた沈黙の秋水の死、有島の屈辱の醜悪な死、ローザの凄惨な死、同胞の苦痛に満ちた反抗の死にさまだ。転がり落ちる美しい青年の血まみれの首。おそらく僕の死もそのどれかだろう。怖れることはない。じつと待つだけだ。

僕も自分の運命をそのように感じてしまう。自分の死体を見てみたい気もする。

明日からはまた忙しい。気も紛れるだろう。それにしても悲しい。

「五」

手紙はこれで終わっている。確かにこの後の大杉は演説

有島武郎が情死した。軽井沢の別荘で心中した。縊死だった。梅雨の間一ヶ月も発見されなかったので、死体は腐乱していたそうだ。蛆虫が湧きおそらく肉塊は下に崩れ落ちて人間の姿をしていなかったろう。白骨化した頭骸骨は縄の先に残っていたらうか。秋水の縛り首が思い出される。

いつか君も僕と一緒に、彼の弟の生馬の絵を観に行つた時に会つたと思う。その後、僕もそんなに会つてはいなかったが、なぜか僕の日本脱出の時は、結構なお金を都合してくれた。ずっと前に僕が洗礼を受けたという話を話したからだ。たかもしれない。彼の作品をいくつか読んだが、その度に悲しくなったのを覚えている。一途に何かを思いこむストイックな彼の性格が心配だった。彼の不倫や金のことも原因らしい。真面目だけに思いつめた彼の苦しみを思うと痛々しくてたまらない。その心も魂も、腐れ果てた物体にはもう残ってはいない。

遺書によると死んだのは六月九日らしい。友人や先輩などは激しく非難している。内村鑑三などは、彼を擁護する者も同じく絶交すると宣言した。結構、僕はその大先生には激しく非難してもらおう。蛆虫の湧いた腐肉に何の罪があるか。

六月九日、僕は丁度ジブチの港にいた。ローザルクセンブルグの獄中手紙を読んでいたところだ。彼女の美しい大きや執筆で忙しく、また妻の出産もあり手紙を投函するのを忘れてそのままになっていたのも肯ける。あるいは林にあってまだ書きたりない気持ちが残っていたとも考えられる。それは林になにか救済を求めていたのではないか、私は根拠はないものの勝手にそう思った。別の世界へ羽ばたいて行きたい、そう思っているも不自然ではない。

その二か月後、大杉は妻とともに虐殺された。予感していた通りだった。古井戸に投げ込まれ、その上から瓦礫を投げ込まれた。肉体は腐乱こそしていなかったが、人間の姿をやつと留めるくらいだった。

追

千九百二十五年、林は三年ぶりに日本へ戻つた。フランス帰りと言われたものの、画壇の評価はさえないものだった。まだバリ在住の中村研一や藤田嗣二の評判におさされていた。翌年、画塾の弟子と結婚してしばらくは平穏な生活をしていた。ただ酒はよく飲み、酔うと友人たちの前でも突然、大杉が、大杉が、と年上を呼び捨てにして号泣したということだった。

二年後、病弱の妻を置いて再渡欧した。まだ燃え上がらない画魂を、燃え尽きるまで追求したいとその熱意は日毎に抑えきれなくなっていた。別れる時、ただ下を向いてい

るだけだったのに、林の姿が見えなくなつてから号泣したと、人から聞いたイヴォンヌにまた会いたいこともあつた。イヴォンヌと再び暮らし始めて彼の意欲が最初の爆発を見せようとした時、偶然の話が入つてきた。イヴォンヌが妊娠したかもしれないと告げたのも同時だった。

パリに甘粕が滞在しているとのことだった。それを聞いた時、彼の胸に熱いものが吹き上げてきてもう抑えることが出来なかつた。パリは広いし、生活圏が違うのはわかっているが、どこかですれ違ふかもしれない。しかし俺が来ているのを知つたら彼は姿を隠すだろう。だが毎日彼を探して歩くこともできない。彼は外に出る時は必ず匕首を持つことにした。偶然に出会つたら、それはもう運命だ、運命を変えることはできない。俺は間違ひなく彼を襲うだろう。彼は元軍人だ。ピストルを携帯しているかもしれない。だが怖れることはない。もし失敗して殺さなくても、顔の半分でもそぎ落とすことはできる。後のことはどうなるかは考えがつかない。

そう思いながら、林は性格上、ただ偶然を待っているだけのことはできなかつた。日本大使館のまわりを歩くことが多くなつた。部屋から地下鉄に乗れば遠くなかつた。日本人の集まるレストランにもしばしば顔を出した。その合間に絵筆を握る日々になつた。日本人を掴まえては甘粕の事を聞いて回つた。誰も口をつぐんでいた。帰国するまで

とうとうその姿を捉えることはできなかった。偶然にしても必然にしても何も起こらなかつた。

完

二十十五年十一月十日

「史実を含んだフィクションである」

参考文献

- 大杉栄全集
- 自由への疾走 鎌田慧
- 林聖子さん談「林俊衛の御子女」
- 王丸容典氏談「大杉栄の孫」
- 大杉豊氏談「大杉栄の甥の子息」
- ジャンジュネ論 バタイユ
- ジャンジュネ伝 エドモンド ホワイト
- 聖ジュネ サルトル
- ジャンジュネ全集